

# 石 仏 散 歩 すとん・さーくる

No.107

発行 新潟県石仏の会(代表 星野 紀子)

2020年3月20日 発行

事務局 〒945-0837 柏崎市三島町16-2 渡邊三四一 電話0257-22-1941

ホームページ <http://niigata-sekibutu.voxx.jp>

石 仏 散 歩

## 阿賀北に残された板碑

新潟市 星 喜久男

新潟支部の石仏探訪会は数年来三国街道中の道を歩いてきた。今年はその最終地、村上市旧神林村を探訪することになった。上林村史によると昭和五十八年当時は村内に八九基の板碑が存在していたと記され、特に鎌倉時代初期から地頭であった色部氏の影響が指摘されている。

色部氏は鎌倉初期、源頼朝の鎌倉幕府創立により武蔵国秩父から地頭に任じられて来た畠山氏の一族で任地の色部を名乗り、戦国時代まで領国支配を続けた。加治の佐々木氏、中条の和田氏なども同じ頃に地頭となり、それぞれの地名を名乗り戦国時代には上杉氏に仕え、上杉の転封と共に会津へ、さらに関ヶ原の合戦以後は米沢に移ったと伝えられている。この関東から来た武士団のもたらした文化の一つが板碑なのである。

この日の探訪会では、残存している八九基の板碑のうち七か所ほど回ったが、私の印象に残るものは少なかった。自分の無知はさておいて、碑面の印刻のはつきりしないものが多かったからだ。石の形状の差異、凸凹のある表面、そこに種子や文字を彫ることは難しい。まして願文や紀年銘などの細かい細

工はいつそう困難だったであろう。

板碑に興味を持ってから発祥地と目されるさいたま市大宮公園内の県立歴史博物館を訪れ、板碑の陳列室を見ることができた。県内の著名な板碑を一室に陳列、展示している。大きなものは摸刻だと言うことだが、一見して「板碑」命名の由来を了解できた。素材の石が全く違うのである。ここの中は荒川上流から産出する緑泥片岩で、この石は板状に容易に加工できるのだ。これなら五メートルを超える板碑も無理なく出来るだろう。だが川原石ではこうはいかない。関東からやってきた武士たちはそれでも故郷の板碑の供養形式を守りたいと川原石に刻み、供養した。

その思いが  
阿賀北の  
人々の共感  
の下に現在  
まで残されて  
いるよう  
に思われた。



東京国立博物館の板碑



村上市有明の光浄寺の板碑

## 下越新潟地区石仏見学会の報告

### 三国街道中通りを歩く

#### —旧神林村—

新潟市 大木 稔爾

五月二十日九時、新潟駅南口バスター・ミナル出発。主な探訪地を列記します。

#### 平林城跡

色部氏の居城。葛籠山頂部に要害が、山麓に壮大な居城がある。曲輪、土壘、堀など良好にのこっている。

色部氏の支配地であった旧神林村から栗島にかけて板碑が濃厚にのこっている。色部氏は後に米沢に移り、戊辰戦争のおり新潟で戦った色部長門はその子孫である。

#### 千眼寺

曹洞宗耕雲寺（村上市）の末寺でやがて色部氏が菩提寺にしたという。写真1は二重枠の中はなんでしょうか。どなたか読んでください。



写真1

## 大智院

村内の塩谷浜で地引網に石地蔵がかかって消えた。村人が「お地蔵様大智院へ行きともちあがつた。そのまま和尚の先導で大智院に着き境内に安置された。（写真2）

三弁宝珠付き阿弥陀板碑 新潟県下の板碑は材質の関係で種子のみがほとんどであるが、当地域はごらんのような莊嚴付きの板碑が散見される。（写真3）

#### 山田の板碑群

（写真5）の説明板より この碑に銘文で阿妙という人名がある。阿妙とは、小泉庄色部系の第六領主色部長倫の後家尼阿妙であり、この銘で見る限り阿妙は十四世紀の前半期に存在していたことが確認される。実在の人物が確認されるのは県内では珍しい。参加十六名 天気晴朗。



写真2



写真3

## 吉祥寺の六面幢

もと裏山の墓地に入る登り口の所にぽつんと立っていたが、今は銅板葺きガラス張りの六角堂に収容されている。上より宝珠、笠、幢身、基礎の四石よりなり、幢身に六体の地蔵立像を浮き彫りにした六面幢とよばれるものである。六体の尊像は眉目美しく柔軟な相貌をそなえ衣の線は無駄なく優美にまとめている。室町時代の作か。（写真4）



写真4

写真5 バクダ  
細かい銘文は  
わかりにくい

## 石仏の冬囲い 見て歩き

一 村上市から山形県遊佐への途上でー

柏崎市 渡邊 三四一

少雪暖冬をいいことに、昨年末、山形県遊佐町まで石仏調査に出かけた。中条インターで日本海東北自動車道を降り、胎内市・村上市経由で北上していくと、冬囲いを施された石仏が目に付くようになる。

村上市大関あたりを走っていると、赤い布にすっぽり包まれた石仏があった。しっかりと布紐で縛られた覆面タイプで、中身の神仏は残念ながら不明である。例年なら雪原の上にこの赤布が顔を出し、存在を主張したのだろう。

鳥海山の麓・遊佐町に入つてもやはり雪はない。おかげで調査は順調に進んだ。帰り道、引き続き冬囲いの石仏の写真を撮った。ビニールシートを巧みに巻き付けた神社の狛犬。ちゃんと口元を開けて息(?)ができる配慮がなされる。路傍の地蔵さんは定番の赤い布のフード付き外套で、よく見れば紐も赤で統一され、その徹底ぶりは見事。一方、隣の丸彫り像はコモ編みの藁をビニール紐で巻き付け、頭部を屋根上に組んで顔が押めるようにしてある。寺院前の地蔵は立派な藁のミノボウシを被る。当地の石仏に対する暖かな想いが、冬囲いの風景から窺えた。



②ビニールシートに包まれた狛犬（遊佐町・貴福神社）



①赤布で全身を覆われた不明石仏（村上市大関）



⑤ミノボウシの地蔵（同）



④藁のコモ編みの石仏（同）



③赤マントの地蔵（遊佐町）

## 事務局だより



### 新型コロナウイルス感染拡大に伴う 新年度前半行事の延期について

百年に一度の少雪暖冬に加え、今度は新型コロナウイルスが国内で流行、三月初めには本県でも複数の感染者が確認されました。こうした現状を踏まえ、会員の皆様の安全をはかる必要から、毎年四月末に実施してきた上越地区見学会を夏以降に延期とさせていただきます。また左記に示す新年度前半の行事についても、状況に応じ延期となる可能性があります。その際は書面でお知らせいたします。ご理解・ご了承のほどお願いいたします。

### ◇令和2年度総会のご案内（予報）

日 時 5月17日（日）13時～16時30分

会 場 まちなかキャンパス長岡（予定）

第一部 公開講演会（13時～14時30分）

講師 青柳保子氏（長岡民話の会  
会長）

演題 民話の中の石仏（仮）

令和元年度事業報告・決算報告  
役員の改選について

第三部	その他	令和2年度事業計画・予算（案）
第四部	情報交換	Eメール tnibi@poppy.ocn.ne.jp
	懇親会	※詳細は別紙チラシをご覧ください。
	17時～	※詳細は後日往復はがきにてご案内 し、出欠等を確認します。
		申込み 伊比卓郎まで（電話かEメールで）
		電 話 090-7275-8869
定 員	参加費	15時30分
25名	4000円（昼食代・資料代等含む）	【図書紹介】坂口和子著『裸足の訪問—石仏の源流を求めて—』富山房インターナショナル刊。268ページ、1800円。
第二部	総会	【書誌紹介】坂口和子著『なぜ野の仏に魅せられるのだろうか』Kōdansha International刊。2019年。著者は日本石仏協会会長。なぜ野の仏に魅せられるのだろうか。野の仏とはじめて出会ってから65年、石の神や仏に寄せる想いの原点を知りたくて、東南アジアをはじめ多くの国々を裸足の気持ちで訪問してきた旅のエッセイ集（帯より）

### ◇書誌紹介

坂口和子著『裸足の訪問—石仏の源流を求めて—』富山房インターナショナル刊。268ページ、1800円。

著者は日本石仏協会会長。なぜ野の仏に魅せられるのだろうか。野の仏とはじめて

出会ってから65年、石の神や仏に寄せる想いの原点を知りたくて、東南アジアをはじめ多くの国々を裸足の気持ちで訪問してきた旅のエッセイ集（帯より）

【図書紹介】坂口和子著『なぜ野の仏に魅せられるのだろうか』Kōdansha International刊。2019年。

【図書紹介】坂口和子著『なぜ野の仏に魅せられるのだろうか』Kōdansha International刊。2019年。

【図書紹介】坂口和子著『なぜ野の仏に魅せられるのだろうか』Kōdansha International刊。2019年。

【図書紹介】坂口和子著『なぜ野の仏に魅せられるのだろうか』Kōdansha International刊。2019年。

### ◇会費納入のお願い

令和元年度会費未納の方に振込用紙を同封しました。至急お振込願います。

編集担当 下越・新潟地区事務局